

未来に活かしたい、先人たちの思い

温故知新

第1回

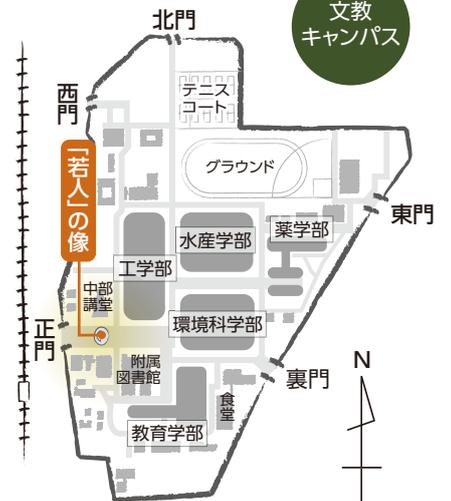
「若人」の像

《文教キャンパス正門前》

ロータリーになっているため、像の存在に気付かない人も多い。かつてはこの像を囲むように、葉を豊かに茂らせた3本のカナリヤシが、ロータリーを印象的に演出していたが、害虫被害で現在の姿になっている。



文教
キャンパス



■題名に違和感あり!?

大勢の学生や教職員が行き交う文教キャンパス正門。その正面に設けられたロータリーガーデンの池のほとりに建っているのが「若人」の像です。

作者は、彫刻家の故・山本稚彦氏（1901—1993元日本美術家連盟理事長）。1958年（昭和33）の第1回日展で、文部大臣賞を受賞したブロンズ像です。

物思いにふけるように、両手を後ろに組み、頭を少し傾けた姿は、どこか寡黙な印象で、「若人」という題名に違和感を憶える人もいるかもしれません。

実は、この作品の原題は「北の人」。作者は、人という字を連想するポーズで、北国の青年が前進する姿勢を表現しています。

■シベリアでの極限生活

山本氏は戦後間もなく、ソ連軍の捕虜となり3年3カ月もの間、シベリアで抑留生活を送りました。厳しい寒さと餓えの中、容赦なく課される過酷な労働。多くの仲間の兵士たちが、故郷の土を踏むこともなく次々に亡くなってい

■作者から若者たちへ

作品が長崎大学に設置されたのは、1959年（昭和34）のこと。当時の大学は、戦時色をぬぐい去り（三菱兵器製作所の跡地につくられた文教キャンパスには、まだその建物が残っていた）、未来を見据えたキャンパスづくりに腐心していた時代です。大学の顔となる正門にもふさわしい像を求め、文部省（現・文部科学省）を通じて、山本氏の作品と出合ったのでした。

「北の人」は、若人の前進する姿がキャンパスにふさわしく、さつそく譲渡を願うと、山本氏は快諾。無償で提供し、原題についても、長崎のキャンパスに合う題として大学が提案した「若人」への改題も許してくれました。

あれから半世紀。いま、あらためて像を見上げれば、どんなに苦しい中にあつても、人間性を失わずに前進する姿勢を若者たちに伝えようとした作者の思いが、心に響いてくるようです。

◆出典／学園だより第25号（昭和46年12月）
学園だより第76号（昭和57年4月）